障害と身体をめぐる旅2020

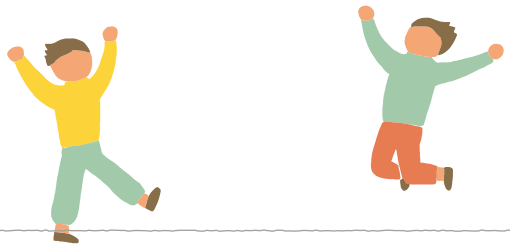
— 実践編 —

令和2年度 神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター 報告書

（運営：認定NPO法人　STスポット横浜）

令和2年度

神奈川県
障がい者
芸術文化活動
支援センター



ごあいさつ

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターは、令和2年4月から活動を開始しました。

運営団体であるSTスポット横浜は、神奈川県横浜市にあるNPOです。「アートの持つ力を現代社会に活かすこと」をミッションに、小劇場「STスポット」を運営する芸術機関として1987年に活動を開始しました。2004年からは地域コミュニティに向けた活動を担う、地域連携事業部を設置し、学校での芸術家による授業の実施や、地域の文化団体支援などを行なっています。

福祉分野における活動は、2016年から開始しました。文化庁による助成や神奈川県との協働事業を通し、地域に暮らす障がい者が芸術文化活動を通して生活の質を向上させ、社会の中で顕在化することで、障がいの有無にかかわらず共生する社会の実現に向けた基盤整備の一翼を担うことを目指した活動を続けています。

本年もさまざまな風景、表現と出会いました。
この冊子では、旅の様子の一端をみなさまにお伝えいたします。

目次

04　神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターについて

〈 つなぐ 〉

06　相談支援

07　協力委委員会

10　情報収集・発信

〈 つくる 〉

12　リエゾン笠間×入手杏奈（ダンサー・振付家）
—「伝える身体、受け取る身体」

14　スプラウト×白神ももこ（演出家・振付家・ダンサー）
—「つながる身体を想像する」

16　のびやか×西井夕紀子（作曲家）
—「それぞれの音からつながる」

18　みどり福祉ホーム×ドゥイ（造形ユニット）、WHITELIGHT（サウンドスケープデザイン）
—「日々の音に耳をすませる」

20　写真展「はじめの一歩」

〈 支える 〉

22　勉強会　第1回「地域の中で芸術文化に触れるために」

23　勉強会　第2回「コロナ禍におけるワークショップを考える」

24　勉強会　第3回「障がいのある子どもたちの学びを広げるために」

25　報告会　地域とともに考える障がい福祉と芸術文化

26　おわりに

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターとは

神奈川県内の障がいのある人が身近な地域で芸術文化に触れられるように、
障がい福祉・芸術文化のネットワーク構築を目指し、
令和2年度4月に開設しました。「つなぐ」「つくる」「支える」の3つを柱に、活動を展開しています。

つなぐ

- 障がいのある人の芸術文化活動に関する相談を受け、適切な情報につなぎます
- 障がいのある人の芸術文化活動を支える人たちのネットワークを構築します

つくる

- 芸術家によるワークショップ等を実施し、障がいのある人が芸術文化活動を体験できる機会をつくります
- 展示会等を開催し、障がいのある人による芸術文化活動を発表する機会をつくります

支える

- 障がいのある人の芸術文化活動を支援するコーディネーター育成に取り組みます

厚生労働省「障害者芸術文化活動普及支援事業」について

障害者芸術文化活動普及支援事業は、2014（平成26）年度から3年間を通じて全国12カ所で行なった「障害者の芸術活動支援モデル事業」の成果やノウハウをもとに2017（平成29）年度から実施しています。

障がいのある人が芸術文化を享受し、多様な芸術文化活動を行なうことができるように、地域における支援体制を全国に展開し、障がいのある人の芸術文化活動の振興を図るとともに、自立と社会参加を促進することをねらいとした事業です。

活動地域に応じて、都道府県「障害者芸術文化活動支援センター（支援センター）」、ブロック「障害者芸術文化活動広域支援センター（広域センター）」、全国「連携事務局」といった支援拠点を設置しています。

全国の状況はこちらのウェブサイトをご覧ください。 https://renkei-sgsm.net ▶▶▶

つなぐ

ここでは、障がいのある人の芸術文化活動に関する情報をつないだり、県内のネットワーク構築に取組んだ活動をご紹介します。パンフレットやウェブサイトを作成し、相談窓口の周知とともに支援センターのイベント情報などを発信したことにより、県内外から障がいのある人の芸術文化活動に関する相談や問い合わせがありました。また、医療・福祉、芸術文化、法律などさまざまな分野の専門家に協力委員を依頼し、支援センターの活動方針について意見交換を行ないました。障がい福祉、芸術文化の枠を超えたネットワーク構築を目指します。

相談支援

協力委員会

情報収集・発信

つなぐ

ここでは、障がいのある人の芸術文化活動に関する情報をつないだり、県内のネットワーク構築に取組んだ活動をご紹介します。パンフレットやウェブサイトを作成し、相談窓口の周知とともに支援センターのイベント情報などを発信したことにより、県内外から障がいのある人の芸術文化活動に関する相談や問い合わせがありました。また、医療・福祉、芸術文化、法律などさまざまな分野の専門家に協力委員を依頼し、支援センターの活動方針について意見交換を行ないました。障がい福祉、芸術文化の枠を超えたネットワーク構築を目指します。

相談支援

協力委委員会

情報収集・発信

相談支援

障がい者やそのご家族、障害福祉サービス事業者等から芸術文化活動に関する相談を受け付けました。
対応件数は38件でした（2021年2月28日時点）。

相談件数の内訳

❶相談者属性　合計：38件

障がい当事者	16
障がい当事者の家族	2
障がい福祉関係者	12
芸術文化関係者	1
企業	3
自治体・支援センター	4
その他	0

❷相談方法（重複あり）　合計：43件

面会	3
電話	26
メール	13
オンライン	1
その他	0

❸居住地別　合計：38件

横浜	15
川崎	2
相模原	6
横須賀・三浦	1
湘南東部	1
湘南西部	5
県央	3
県西	0
県外	5
不明	0

❹相談内容　合計：38件

発表の機会について	12
交流の機会について	3
鑑賞の機会について	3
創作・体験について	5
著作権について	0
販売について	1
その他	14

相談内容の例

- 発表の機会について……●新型コロナウイルスの影響でいつも作品を発表しているイベントが中止となってしまった。
- 交流の機会について……●音楽や写真を趣味にしているが、いっしょに楽しむ仲間が欲しい。
- 鑑賞の機会について……●福祉施設内でコンサートを予定しているが、演奏者を紹介してもらえないか。
- 創作・体験について……●福祉施設でダンスの活動をしてみたい。
- 販売について……●音楽づくりをしており、CDの販売をしたい。
- その他……●支援センターの活動内容について教えてほしい。
  ●障がいのある子どもたちの学校卒業後の学びの場はないか。

相談内容から見えてきたこと

- ご自身の状況をお話しいただける当事者の方からのご相談が多くありました。地域のサークルは年齢層が合わない、金銭的な事情があるなどさまざまな理由から、芸術文化活動を行なう課題が聞かれました。改めて、障がいのある人が参加できる地域の文化施設や芸術団体等の情報収集の必要性を感じました。
- 県内では、まだまだ相談窓口の周知が行き届いていない地域があると感じています。小規模でも対面で相談に応じられる機会を作るなど、より相談しやすい体制を整えていきたいと思います。

協力委員会

神奈川県内外で活動する、障がいがある人との芸術文化活動に造詣の深い専門家による協力委員会を設置し、年4回の会議を開催しました。障がいがある人と芸術文化がどのように関わっていったらよいのか、また神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターはどのような役割を担うべきなのか、多角的な面から議論を行ないました。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、すべての回でオンライン会議ツールを使用して開催しました。

◆ 構成員 ◆

専門委員	行政関係者	オブザーバー
佐藤 大輔（NPO法人スプラウト）	神奈川県障害福祉課	相模原市高齢・障害者福祉課
中村 麻美（横浜ピアスタッフ協会）	神奈川県共生社会推進課	川崎市障害福祉課
藤川 悠（茅ヶ崎市美術館）	神奈川県文化課	川崎市市民文化振興室
又村 あおい（一般社団法人 全国手をつなぐ育成会連合会）	横浜市障害自立支援課	
和田 剛（障害者スポーツ文化センター 横浜ラポール）	横浜市文化振興課	

第1回 協力委員の紹介

日時：2020年9月9日（水）　17時30分～19時20分

初回ということで、参加者全員に自身の活動について紹介していただきました。

平塚市で医療的ケアを必要とする重度重複障がい者が多く通うスプラウトで管理者・看護師をしている佐藤さんや、横浜市で精神障がい当事者と、ピアスタッフの取組みを広める活動をしている中村さんからは、コロナ禍におけるそれぞれの支援の現状などもうかがいました。また、茅ヶ崎市美術館の学芸員である藤川さんからは、昨年度行なった障がい者や子どもなどの感覚の特性に焦点を当てた企画展の紹介をしていただきました。横浜市に設置されている障がい者の文化活動・スポーツ活動を通した交流の場である横浜ラポールにて文化事業を担当する和田さんからは、障がい者が地域のスポーツ施設や文化施設を利用することにハードルの高さを感じている印象があることが伝えられました。障がい者の権利に関する専門家として今回協力をお願いしている又村さんからは、権利擁護の視点から芸術文化への期待をお話しいただきました。

支援センター（川村、小川、田中）　和田 剛　藤川 悠

佐藤 大輔　又村 あおい　中村 麻美

第2回 障がい福祉と芸術文化がつながるために あったらよいこと

2020年10月20日（火）　17時30分～19時00分

そもそもなぜ障がい福祉と芸術文化がつながる必要があるのか、ということから議論を進めました。
佐藤さんや中村さんからは、当事者との関わりから、障がいのある人の生活の選択肢を広げるために芸術文化が有効なのではないかという意見がありました。それを受けて藤川さんからは、芸術文化側からも表現と捉えられているものの幅を広げるアプローチする必要があり、それはお互いに意味のあることではないかという話がありました。
また、つながりを作るための課題として人材育成と情報収集・発信がキーワードとして挙がりました。障がいのある人の芸術文化活動を支える人材が、どの分野にいることが望ましいのかということや、どのような情報が障がいのある人に届いたらよいのかなど、課題を整理していました。

第3回 「10年後の障がい福祉と芸術文化の関わりに望むこと」から考える支援センターの役割

2020年12月10日（木）　13時00分～14時30分

「10年」という中長期的な視点から、障がい福祉と芸術文化の関わりのあり方について意見交換をしました。
和田さんからは、障害者差別解消法の制定などの、過去10年間の制度の変化を振り返り、「障がい/健常者の隔たりがなくなれば」というお話がありました。また佐藤さんからも制度という観点で、「福祉施設に芸術文化の専門家を配置することを義務付ける制度あればよいのでは」という意見も出ました。
一方で中村さんは、福祉の制度は当事者を中心とした活動から立ち上がっている点を挙げ、「芸術文化分野においても、障がい当事者の声が上がっていく必要がある」と当事者の声を拾い上げる必要性を投げかけました。

第4回 次年度の神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターの取組みについて

2021年1月21日（木）　14時00分～15時30分

これまでの議論を踏まえ、人材育成を中心に次年度の支援センターの活動のあり方を考えました。佐藤さんや中村さんからは福祉現場にいる実感から、福祉施設職員が芸術文化に触れる機会があまりないことや、施設内で行なわれるレクリエーションの選択肢を増やすことへの働きかけとして、既存の福祉関係の研修などで支援センターの活動の周知を行なうなどができないかという意見がありました。また佐藤さんは、スプラウトで実施した芸術家とのワークショップに触れ、支援の幅が広がることに繋がったという実感があったと話します（取組みの詳細はp14-15を参照）。
今年はコロナ禍の影響を受け、オンラインでのワークショップや講座なども実施しましたが、余暇活動などができなくなっている福祉施設などに向けてオンラインの取組みを紹介することで、ノウハウの共有が図れるのではないか、という意見もありました。

協力委員より
「支援センターの取組みに期待すること」

中村麻美さん

福祉現場で働く職員が、いかに芸術文化活動に興味を持ったり、利用者にとってどんな意味があるのかを考えるための場を設けられたら良いと思う。芸術文化活動も、支援する中で提供するべき選択肢の一つなんだと、自覚を持ってもらえるような働きかけを、支援センターが積極的に行なえるとよい。また、福祉分野は分業化され、バラバラになっている。支援センターには、芸術文化が持っている分断されているものをつないでいく力を活かして、そのような役割を期待したい。

佐藤大輔さん

芸術文化活動が支援の選択肢に加わるということは、利用者に提示できる選択肢も増えたということになるし、彼らの選択肢を増やす・広げることが、意思決定支援の一役を担うことにつながると考えてる。今回スプラウトに芸術家が来ていただけたように、気軽に福祉施設と芸術家がつながれる仕組みがあるとよいと思った。また、コロナ禍におけるオンラインの取り組みなど、いかにこの状況の中で面白いことができるかを考えるのが、支援センターの役割と言ってもいいと思う。

藤川悠さん

「疑いを持つこと」が、芸術が社会にとって必要な理由の一つだと思う。「私たちが彼らに行なっていることは、本当にサービスとして合っているのか」など少しでも疑いを持って見てみるための「目」を、福祉業界の中に入れていくことが、芸術文化ができることの一つなのではないか。支援者自身が、何ができるかを模索する機会があるとよいと思った。さらに、より多くの人を巻き込むために、障がい福祉と芸術文化がつながる試みを一般の人に届けるような見せ方の工夫があると良い。

又村あおいさん

福祉施設において「芸術文化活動とは何なのか」「芸術文化活動が人の暮らしを潤すとは、一体どういうことなのか」「彼らの暮らしぶりが豊かになる・表現の幅が広がる・選択肢が増えることに、どういう意味があるのか」等の入口が全くないまま、芸術文化活動が行なわれていると感じる。支援センターとして、障がいのある人の暮らしの豊かさを支えることと芸術文化活動がリンクするような取組ができるとよいのではないか。

和田剛さん

支援者側に興味を持ってもらう機会としての研修や、障がいのある人に興味を持ってもらえる体験の機会などがあることで、新たな広がりが生まれるのではないか。芸術文化に触れるきっかけを見出せない人や、触れたくても情報がなくて辿り着けない人に、支援センターが情報を届けられるとよい。地域の情報が少ないがゆえに、行き先を失っていることが多くあるので、情報発信を支援センターに期待したい。

情報収集・発信

パンフレットやウェブサイトを作成し、相談窓口の周知やセンター主催のイベントの広報を行ないました。

パンフレット

ウェブサイト

メディア掲載

- 福祉新聞「 心に響く瞬間を見て　障害者芸術で写真展「はじめの一歩」」(2021年1月25日)

シンポジウム等への登壇

- 「社会包摂のみらいをみんなで考える研究会～文化芸術での取り組みはひろがるか～」
  (主催：福岡舞台芸術施設運営協働事業体、舞台芸術活動による社会参加推進実行委員会/2020年12月20日)
- 障害と芸術文化の大見本市きいて、みて、しってオンライン見本市。「ひらけSOUP①文化の中間支援が、福祉の中間支援と出あうとき」
  (主催：障害者芸術活動支援センター@宮城（SOUP)/2021年2月8日)
- 栄区地域活動交流コーディネーター連絡会「令和２年度研修会」(主催：横浜市栄区社会福祉協議会/2021年3月10日)
- 「つながる！ひろがる！パラアート・ミーティング」(主催：公益財団法人 川崎市文化財団/2021年3月12日)
- 対話＆創造ラボ「異なる感覚・視点を持つ他社と自己へのまなざし」
  (主催：市民セクターよこはま・関内イノベーションイニシアティブ共同事業体、横浜市市民共同推進課/2021年3月21日)

つくる

ここでは、障がいのある人が芸術文化活動に触れたり、発表する機会をつくる活動についてご紹介します。今年度は県内4か所の障害福祉サービス事業所にて芸術家によるワークショップを実施しました。新型コロナウイルスの影響を受け、うち2か所は完全にオンラインで、1か所は対面で、1か所はオンラインと対面と混同での実施となりました。発表の機会としては感染症対策を行ないやすい写真展という形態で、ワークショップの記録写真を展示しました。実際に会って集まることが難しい状況で、さまざまな工夫によって豊かな時間が生まれました。

ワークショップ実施

写真展

リエゾン笠間×入手杏奈

ダンス
DANCE

「伝える身体、受け取る身体」

期間：(1)2020年12月3日㈭　(2)12月9日㈬　(3)12月14日㈪
実施形態：福祉施設と配信会場をつないでのオンライン実施　　配信会場：障害者スポーツ文化センター ラポール上大岡　多目的室
対象：身体障がいと知的障がいを併せ持った成人。言葉での意思表示ができる方もいれば、ことばでのコミュニケーションが難しかったり、表現が微細な方もいる。
アーティスト：入手杏奈（ダンサー・振付家）　　アシスタント：涌田悠、斉藤稚紗冬　　映像：須藤崇規、三上亮

対象施設名：障害者支援施設　リエゾン笠間　　運営法人名：社会福祉法人同愛会　　施設種別：障害者支援施設
住所：神奈川県横浜市栄区笠間3-10-1　　URL：https://liaison-kasama.com

01
12/03㈭
参加11名
10:15-11:15

別会場にいる入手さんとオンラインでつないだワークショップの1回目。職員さんのみが参加し、身体のほぐし方やゆったりした呼吸を体感した。画面越しの入手さんの「バターのように柔らかく溶けるイメージで」の言葉に、それぞれのイメージで、身体や呼吸に意識を向けていた。

02
12/09㈬
参加 10名
10:15-11:15
14:00-15:00

まずは入手さんのダンス動画をみんなで鑑賞。すでに一緒に手を動かす方も。次に参加者と職員のみなさんがペアになって、手や身体に触れ、柔らかさ、温かさを伝え合った。最後はスクリーンに大きく映る入手さんと1対1になり、同じように触れ合ったり、動き合う時間を過ごした。

03
12/14㈪
参加 10名
10:15-11:15
14:00-15:00

今回も参加者と職員のみなさんで、お互いの身体に触れる。歌ったり、目を合わせたりしながらさらにコミュニケーションを深めていた。最後は職員が参加者の車椅子を押して、会場の中をゆっくりお散歩。参加者同士がすれ違う時に握手しようとするなど、自然な触れ合いが生まれていた。

COMMENT

福祉施設職員からのコメント

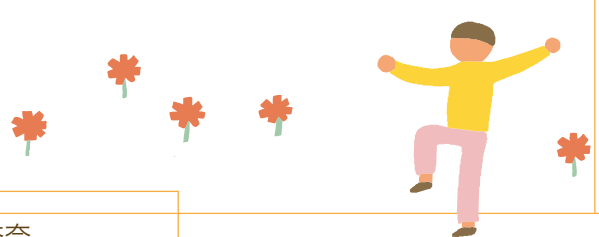
入手さんとの取り組みは昨年度に引き続きでしたが、オンラインでの開催は触れられないことのもどかしさがありました。視点が合わないなど通じ合うことが難しい部分もあり、物理的にも心理的にも遠く感じられることもありましたが、その中でも「○○さん」と声をかけられることでの反応は顕著でした。また、入手さんの動きを見ながら利用者が動き、またその動きを見て入手さんが動く、ということでお互いに相手を感じ取るということが出来ていたように思います。（小浜朋美）

アーティストからのコメント

今回はオンラインでの開催なりましたが、画面越しでも参加者のみなさんの空気を感じることができました。人の伝える力、受け取る力は時空を越えてこんなにも強く存在するのかと、とても勇気をもらいました。ダンスはコミュニケーションだということを改めて感じました。人とのコミュニケーションを私は渇望しているし、それによって生かされているのだと今回の取組みを通して思いました。（入手杏奈）

コーディネーターからのコメント

昨年度、触れることをテーマにしたダンスを実施し、そのときの体験を引き継いだ内容となりました。初日に入手さんが意図する“触れる”を職員のみなさんに伝える時間を設けたことで、利用者さんと職員さんとの間で生まれるコミュニケーションが豊かになったように思います。入手さんと実施に触れ合えない戸惑いもあったかと思いますが、画面の中の入手さんと向き合ったときに自然と身体が動く光景からは、そこにあるお互いの身体を受け取っていることが感じられました。（川村美紗）



入手杏奈
いりて・あんな

幼少よりクラシックバレエを学ぶ。コンテンポラリーダンスを木佐貫邦子に師事。
ソロ活動を主軸に、ダンサーとしてさまざまな振付家の作品に出演。画家、染織家、音楽家とのコラボレーションや、演劇作品への振付・出演、多数の音楽PV（9mm Parabellum Bullet、ポルノグラフィティ、YUKI、スキマスイッチ等）の振付・出演を行なう。ソロ作品では自筆のテキストを使用し、発語と身体の在り方を模索。2014年「第1回ソロダンサフェスティバル2014」最優秀賞受賞。
2018年「SICF19PLAY」住吉智恵賞受賞。桜美林大学非常勤講師。https://twitter.com/nnaeii

スプラウト × 白神ももこ

ダンス
DANCE

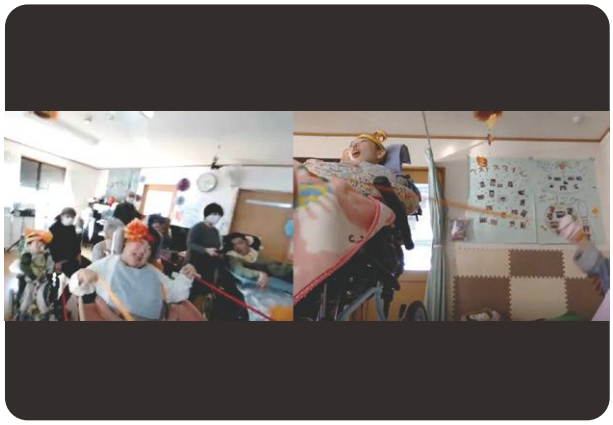
「つながる身体を想像する」

期間：(1)2020年10月2日㊎　(2)11月11日㊌　(3)12月4日㊎　　実施形態：福祉施設と配信会場をつないでのオンライン実施
配信会場：(1)急な坂スタジオ 2F和室　(2)STスポット　(3)障害者スポーツ文化センター ラポール上大岡　多目的室
対象：主に知的障がいと身体障がいを併せ持った成人の方。痰の吸引など医療的ケアが必要な方もいる。
アーティスト：白神ももこ（演出家・振付家・ダンサー）　　アシスタント：内海正考、北川結、長峰麻貴　　映像：須藤崇規、内田圭

対象施設名：生活介護スプラウト　　運営法人名：NPO法人障害児・者・家族サポート事業所スプラウト　　施設種別：障害福祉サービス事業所(生活介護)
住所：神奈川県平塚市北豊田510-3　　URL：http://sprout.or.jp/index.html

01
10/02㊎
参加 7 名
14:00-14:30

初回はお久しぶりの挨拶から始まった。スプラウトから劇場に行ってみたいという声もあったことから、事前に撮影した白神さんが稽古場を案内する映像を見ていただく。最後に白神さんたちが音楽に合わせてダンスを披露し、あっという間の30分だった。



02
11/11㈬
参加 8 名
14:00-14:30

スプラウトと白神さんたちの双方に同じ色のカラーゴムを用意。カメラに向かってゴムを投げると、同じ色のゴムが相手側の画面にも伸びてくる。目の前のゴムを揺らすと相手のゴムも揺れる。画面を越えて本当につながっているような空間が生まれた。

03
12/04㈮
参加 7 名
14:00-14:30

今回のテーマは「南半球のクリスマス」。ゴムを使ったキャッチボールをしているうちに、トナカイに扮した白神さんたちがゴムを体に巻きつけて、ビニールシートの海へと参加者を誘う。嵐がやってきて力尽きるも、参加者の「起きて！」の声にハッと起き上がる白神さん。遠くに離れていても、ひとつの砂浜でつながっていた。

福祉施設職員からのコメント

新しい試みでした。感染症の蔓延がなければ絶対にやらないことでした。スプラウトのスタッフはオンラインに慣れていない人ばかりでしたが、それしかできないとなると、意外にも適応できるのだなと思いました。実際に触れ合って行なわれるワークショップが一番いいに決まっているという固定観念を誰もが持っていて、オンラインで実施することに意味があるのかと考えることもありましたが「これはこれでありだね」というところに着地しました。「成功」と表現してよいかなと思います。
（佐藤大輔）

アーティストからのコメント

対面でワークショップができなくなってしまったので、どうなることかと思いましたが、今回の取り組みを経て「できないこと」は、新しい何かを生み出す原動力になるのだなと改めて感じました。毎回、ドキドキハラハラわくわくギラギラしていました。初めてだから失敗してもいいんだ、というお互いの同意のもと、たくさんのことを試させていただけました。スタッフの方々の協力をものすごく得ながら、クリエイティブな時間を過ごせたと思います。
（白神ももこ）

コーディネーターからのコメント

映像を見ることが中心となった１回目は、お互いにコミュニケーションを取っている実感を持つことが難しい様子でした。ゴムや紙の帽子などのアイテムを使った2回目、さらにアイテムから物語を共有した3回目と、共通の物事から想像力を働かせることで、同じ時間を過ごしている感覚につながっていたように思います。もしかすると、対面ではなくオンラインだからこそ楽しめることがあるのかもしれない、と気づかされた時間でした。
（川村美紗）

白神ももこ
しらが・ももこ

ダンス・パフォーマンス的グループ　モモンガ・コンプレックス主宰。全作品の構成・振付・演出を担当。無意味・無駄を積極的に取り入れユニークな空間を醸し出す作風には定評がある。その他、演劇での振付や、他分野のアーティストとのコラボレーションも手がける。老若男女問わず一般向けのダンスワークショップや教職員向けのワークショップなども行なっている。2017-2018年度セゾン文化財団ジュニアフェロー。四国学院大学非常勤講師。2019年度より埼玉県富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督就任。 http://momongacomplex.info（モモンガ・コンプレックス）

のびやか × 西井夕紀子

音楽 MUSIC

「それぞれの音からつながる」

期間：（1）2020年9月25日㊎　（2）2021年3月5日㊎　（3）2021年3月30日㊋
実施形態：（1）福祉施設にて対面による実施。（2）福祉施設と配信会場をつないでのオンライン実施。（3）福祉施設にて映像鑑賞
配信会場：（2）障害者スポーツ文化センター ラポール上大岡　多目的室　　撮影会場：（3）障害者スポーツ文化センター ラポール上大岡　多目的室
対象：主に知的障がいのある成人。　　アーティスト：西井夕紀子（作曲家）
アシスタント：村野瑞希、宮坂洋生、北川結、松島俊哉、Yuima Enya　　音響：片岡敬　　映像：鈴木竜一朗

対象施設名：生活介護事業所　のびやか　　運営法人名：社会福祉法人さがみ愛育会　　施設種別：障害福祉サービス事業所（生活介護）
住所：神奈川県相模原市中央区横山4-12-14　　URL：https://nobiyaka.sukoyakahoikuen.jp/

01
09/25㊎
参加 10名
13:30-14:15

手作りのカホンや録音した蝉の声など、参加者が持ち寄ったさまざまな「音」で西井さんたちとセッション。誰かの動きを手本に踊ったり、歌ったり、楽器を鳴らしたり、それぞれの得意なことにフォーカスする。最後は参加者お手製のプラカードを持って、みんなでダンス。

02
03/05㊎
参加 6 名
10:50-11:50

今回はオンラインでの実施。一昨年度のワークショップで生まれた歌に振りが付き、みんなで歌って踊ることから始まる。最後は参加者一人ひとりと対話をし、リクエストに応じて西井さんたちが演奏をする。参加者も楽器を持ってセッションに加わり、この日限りのオリジナルメドレーが出来上がった。

03
03/30㊋
参加 20名
13:30-14:00

2回目の内容を盛り込んだオリジナルメドレーを西井さんたちが演奏し、その様子を映像にまとめて、のびやかのみなさんに届けた。これまで参加していない方も、映像を見ながら歌ったり踊ったり。広めの部屋で大画面で映し、ディスコのように楽しんだ。

COMMENT

福祉施設職員からのコメント

西井さんが一人ひとりとやりとりしながら、分かりやすく丁寧に進行してくださり、みなさん笑顔で参加されていたことが印象的でした。ドラマー、ダンサー、歌手など多様なアシスタントの方に来ていただき、楽器や歌、音に合わせて身体を動かす等、さまざまな楽しみ方ができたように思います。2回目はオンラインでの実施となり、慣れない準備もありましたが、支援センターとやりとりをしながら、スムーズに行なうことができました。
（小野塚豊治）

アーティストからのコメント

顔を見合わせる喜びにひたった1回目。動き、声、楽器、録音された自然の音が影響を与え合い、音楽が生まれる時間のうねりを思い出させてくれました。2回目はオンライン。ダンスミュージックを演奏すると、画面の向こうでもエネルギーがあふれていました。楽しい気持ちや音楽が空間を越えると、ここまで実感できたのははじめてでした。笑顔が忘れられません。さまざまな「はじめて」の中、のびやか、アシスタントのみなさんの協力を得て成り立ちました。（西井夕紀子）

コーディネーターからのコメント

西井さんとのびやかのみなさんは、一昨年度の実施以来久しぶりの再会となりました。今回は一人ひとりの得意なことにスポットを当て、その人が輝く瞬間が生まれる時間となりました。2回目以降は感染症拡大の影響を受け、期間が空いてしまい、かつ対面での実施が難しくなってしまいました。それでもオンライン上で会えた時の喜びと熱気は、画面を越えて伝わってきました。西井さんとのびやかのみなさんとの信頼関係が築かれていて、そのことが音を楽しむ時間を豊かにしていることが感じられました。（川村美紗）

西井夕紀子
にしい・ゆきこ

1983年生まれ。作曲家。東京国際芸術祭参加演劇作品『アトミック・サバイバー –ワーニャの子どもたち–』（演出：阿部初美、2007）、ドキュメンタリー映画『おとなのかがく』（配給：Studio Q-Li、監督：忠地裕子、2014）、フェスティバル/トーキョー20参加作品『わたしたちは、そろっている。』（モモンガ・コンプレックス、2020）など、舞台、映画への楽曲提供を行なうかたわら、人が音楽を奏ではじめる瞬間・作りはじめる瞬間に魅力を感じ、学校、文化施設、福祉施設でセッションや曲作りを実施。
東京芸術大学音楽学部音楽環境創造学科卒業、同大学院修了。https://www.yukikonishii.com/

みどり福祉ホーム × ドゥイ、WHITELIGHT

「日々の音に耳をすませる」

美術 ART

期間：(1)2020年10月26日㊊　(2)10月30日㊎　(3)11月2日㊊
実施形態：福祉施設にて対面による実施
対象：主に身体障がいと知的障がいを併せ持った成人の方
アーティスト：ドゥイ（造形ユニット）、WHITELIGHT（サウンドスケープデザイン）

対象施設名：みどり福祉ホーム　運営法人名：NPO法人みどり福祉ホーム　施設種別：障害者地域活動ホーム
住所：神奈川県横浜市緑区十日市場町808-3　URL：https://midori-fukusi.wixsite.com/midorifukusi

01
10/26㊊
参加21名
10:30-11:15
13:30-14:15

遠くの音や特定の音を拾える、集音マイクを使って音を聞く。2つのグループに分かれ、片方のグループが過ごす部屋の音を拾いスピーカーを通すと、いつもと違うように聞こえる。なんの音だろうと不思議がる表情の人も。

02

10/30㊎

参加 17名

10:30-11:15
13:30-14:15

1つの集音マイクに2つのイヤホンをつなぎ、職員さんとペアになって音を探す。外に出て石や葉っぱをこする音にマイクを向けると予想外の音がする。職員のみなさんは、相手がどんな受け取り方をしているのか、反応を見ながらあちこちにマイクを向けていた。

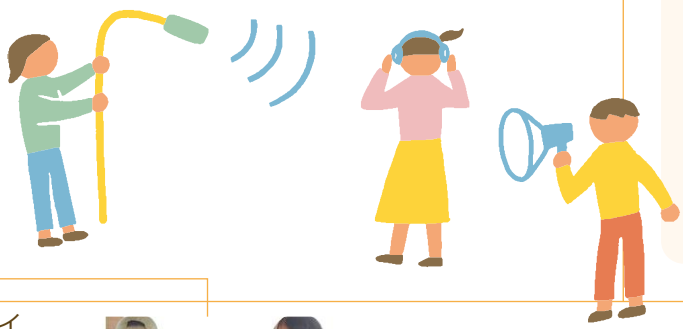
03

11/02㊊

参加 20名

10:30-11:15
13:30-14:15

今回は広めの部屋に金属や紙など、音の出る素材を用意し自由に触る。その場でさまざまなマイクを使ってその音を拾い、スピーカーで聞いてみる。みなさんの笑い声や名前を呼ぶ声も混ざり合い、日常の音が特別な音楽のように空間に広がった。



COMMENT

福祉施設職員からのコメント

ふだんの支援の中で、利用者さんの好きな音や苦手な音といった日常の姿を、なんとかかたちにできないかということが課題でした。「聞く」というテーマを最終日まで意識したことで、形のない流動的な利用者さんの生の姿がたくさん見られたことは、今後の支援に活かせると感じました。（大川祐）

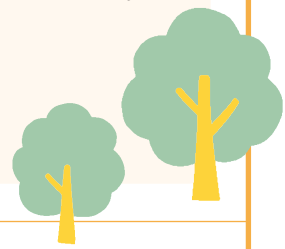
アーティストからのコメント

今回はWHITELIGHTと相談し、音を「鳴らす」のではなく「聞く」ということに焦点を当てました。音がすると徐々に耳をすましはじめ、聞くことによってなにかを感じている、ということがはっきりと見えてくるさまがとても印象的でした。音を、耳はもとより、体で感じるような体験があり、私自身発見の多い時間となりました。
（ドゥイ・小野亞斗子）

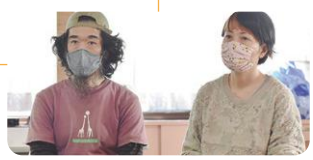
日々音の探究を続けておりますが、アーティストや同業者以外で、ここまで繊細に音に関するディスカッションができた現場は初めてです。職員のみなさんとの会話から、日頃から「認知機能」ということに関して、鋭い観察や分析・実践が行なわれていることを知り、圧倒されました。障がいと呼んでいる違いがあるからこそ生まれている価値の一つだと感じます。とても勉強になりました。
（WHITELIGHT・甲斐宣明）

コーディネーターからのコメント

それぞれが持っている感覚の違いを、音を通して共有したいという職員さんの想いから今回取組みが始まりました。マイクやスピーカーを通して、その場にいる全員が同じ音を聞くなかで「なんの音だろう」「これはどんな音がするだろう」「みんなはどう聞こえているのだろう」と、それぞれの想像力を働かせる場が生まれていました。
（川村美紗）



ドゥイ



小野亜斗子・轟岳によるユニット。2006年より横浜・石川町の「ドゥイの実験室」にて、こども造形教室をスタート。その他、各地イベントにてワークショップを考案・実施。参加者それぞれの面白さやひらめきと即興性を大切に考える、「クリエイティブな遊びの時間」を研究している。http://duilab.com

2010年、重力の束縛から魂を解放する事を目的として設立。複数のスピーカーから独立音源にて音響空間をつくるマルチチャンネルを主な手法として、建築における音響設計、音源製作、ライブ等でのミックスを行なう。http://whitelights.jp

WHITELIGHT（ホワイトライト）

写真展「はじめの一歩」

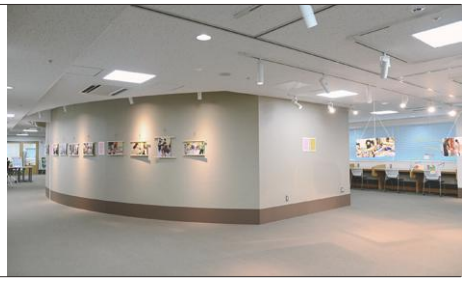
ラポール上大岡

相模原市民ギャラリー

今回は、過去のワークショップ実施を含めた記録写真を展示する写真展を行ないました。
ダンサー・フォトグラファーの金子愛帆さんによる写真を通して、障がいのある人たちが身体、音、色などさまざまな表現に出会う「はじめの一歩」を踏み出す瞬間と、そこから生まれる表現に寄り添う芸術家たちのまなざしを感じていただく機会となりました。
また、写真展と合わせて、支援センター職員が常駐し相談を受けつける相談会も開催しました。
相模原市民ギャラリーでの展示では、ワークショップにもご一緒していただいた造形ユニット・ドゥイさんに展示のディレクションをしていただきました。写真を貼り合わせた直方体をモビールのように吊るし、ゆらゆら揺れる中を歩いて鑑賞する展示方法となりました。また、今年度みどり福祉ホームで行なったワークショップの音を録音した音源を、ホワイトライトのみなさんによる音響設計で会場に流しました。展示の工夫と音により、人がいる気配を感じるような空間が作られました。

会期 | 2021年1月15日(金)～17日(日)
会場 | 相模原市民ギャラリー 第1展示室
神奈川県相模原市中央区相模原1-1-3　セレオ相模原4階
来場者数：54名　　展示ディレクション：ドゥイ(造形ユニット)
音響設計：株式会社ホワイトライト　　展示キャプション文字提供：まどか工房

会期 | 2021年1月27日(水)～29日(金)
会場 | 障害者スポーツ文化センター ラポール上大岡　展示コーナー
神奈川県横浜市港南区上大岡西1-6-1 ゆめおおおかオフィスタワー8階
来場者数：28名　　相談者：2名



オンライン開催

相模原市民ギャラリーでの展示の様子を映像にまとめ、ウェブサイトで公開しています。
URL：https://k-welfare.org/event/centerevent/r2online_exhibition
映像：柏木賢和　　BGM：みどり福祉ホーム × ドゥイ、WHITELIGHT

写真ディレクション：金子愛帆

協力：アガペサポートセンター、磯子区障害者地域活動ホーム、ザ・PUSH、スプラウト、光の丘、まどか工房、みどり福祉ホーム、リエゾン笠間、リバーサイド泉Ⅲのぞみ・ひまわり、YSK作業所
モビールイラスト提供：磯子区障害者地域活動ホームのみなさん

支える

ここでは、障がいのある人の芸術文化活動を支援するコーディネーター育成に関する取組みをご紹介します。今年度は支援センターの柱である「つなぐ、つくる、支える」が機能するための視点のあり方を考えるために、地域共生社会や意思決定支援などの制度や、今年度の福祉施設でのオンラインワークショップの実践、特別支援学校での家族や地域を巻き込んだ取組みについてゲストに話をうかがう勉強会を行ないました。今回は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、全3回をオンラインでの音声配信で行ないました。遠方であったり子育て中であったり、さまざまな事情からふだん勉強会に参加しづらい方にも参加していただく機会となりました。

勉強会

報告会

地域の中で芸術文化に触れるために

第1回

又村あおい（全国手をつなぐ育成会連合会　常務理事兼事務局長）

公開日：2020年11月6日(金)～11月9日(月)　　参加者：72名

収録場所：STスポット（神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビルB1F）　　録音・整音：柏木賢和

制度や分野を越えることを目指す「地域共生社会」

第1回のゲストは、障害者差別解消法アドバイザーを務めるなど、障がい福祉分野における制度に精通する又村あおいさんです。今回は、「地域共生社会」と「意思決定支援」の2つの観点から、地域の中での芸術文化の役割や必要性についてお話しいただきました。

「地域共生社会」とは、制度や分野ごとの縦割りを解消し、支え手と受け手の関係性を循環させて、みんなが関われる社会を目指すという、今後の福祉の方向を示す考え方です。地域共生社会の考え方の中では、障がいのある人に限らず、高齢者や子ども、外国籍、貧困など、さまざまな状況にいる人を広く包括しています。また地域の中で、福祉以外の分野とつながる（例えば農福連携をすることで、農業での人手不足を解消する等）ことで、支える／支えられるといった役割を行き来することができます。そしてその分野の中に「芸術文化」も含められるのではないか、と又村さんは語ります。

又村さんたちが新たに提案している就労継続支援「C型」は、「地域にとって不可欠な存在になる」、「コミュニティの中で集える場になっていく」ことに着目した事業所として、すでに芸術文化に取り組んでいる事例もあります。パブリックアートやアール・ブリュットなど、特に専門的教育を要しない芸術文化活動は、年齢や性別、障がいの有無に関係なく、興味関心があれば誰でも参加できるため、水平的な関係を保つことができます。また作品を通して人となりが分かり、相互理解につながったり、福祉サービス等においては「受け手」である人が、「作家」という肩書を持つことで、芸術文化の中では「支え手」になることもできる、という期待を持つことができます。又村さんは「芸術文化に関わる人にこそ、こうした理解が広まって、当たり前に行なわれるようになれれば」と希望をこめて話します。

「違い」を見つめることが意思決定支援の入り口

もう一つ、最近注目されている「意思決定支援」も芸術文化との関係が深いと話題に取り上げられました。私たちは日々受け取った情報を経験から判断、選択し、実行するということを繰り返しています。この一連の意思決定の手助けをすることが「意思決定支援」です。ここには、法律の範囲内で自分の意思で自由にふるまう権利を守る「権利擁護」の文脈も大きく関係します。

意思決定にはそれぞれの成育歴や価値観が大きく影響し、違いを生みます。石ころをひたすら集めたいという一見理解しづらい意思決定も、アーティスティックと捉えることが支援となり、権利擁護につながるかもしれません。「私」と「あなた」は違うということを楽しむことが、芸術文化活動にも意思決定支援にも通ずる大切な視点ではないか、と又村さんは投げかけました。

芸術文化も障がい福祉も、お互いの常識を疑いながら関わってみると、見方がひっくり返るような気付きが生まれるかもしれません。そうした発見をお互いにすることができたら、よりおもしろい関係に発展するのではないかと思いました。

又村あおい
（またむら・あおい）

平成7年、神奈川県平塚市役所入庁。平成11年度から18年度まで平塚市役所障がい福祉課に在籍。障がい者福祉計画、支援費制度・自立支援法の施行、障がい児支援全般を担当。平成26年度に内閣府へ出向。令和2年度より現職。内閣府の障害者差別解消法アドバイザー他、数多くの障がい者団体の委員、構成員、講師等を務める。

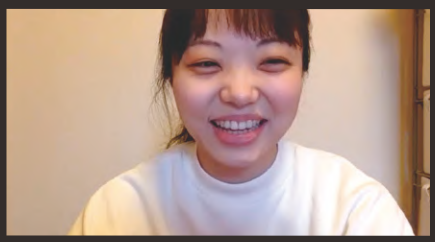
コロナ禍におけるワークショップを考える

第2回

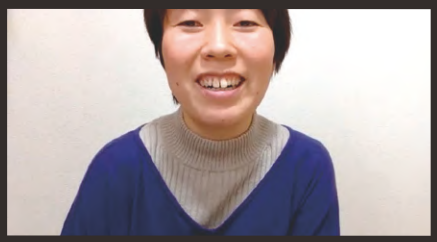
入手杏奈（ダンサー・振付家）、白神ももこ（演出家・振付家・ダンサー）

公開日：2021年1月22日(金)〜1月25日(月)　　参加者：65名

収録場所：オンライン会議システム Zoom を使用　　整音：柏木賢和



入手杏奈



白神ももこ

支援センター（田中、川村）

オンラインならではの楽しみ方を考える

今年度のワークショップ実施事業では、コロナ禍の影響を受け、オンラインでのダンスワークショップに取り組みました。アーティストとして事業に関わっていただいた入手杏奈さん、白神ももこさんに、改めて取組みを振り返っていただきました。

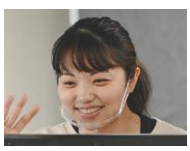
入手さんは昨年度に引き続き、リエゾン笠間での取組みを行ないました（※詳細はP12-13参照）。昨年度は触れることに焦点をあてた取組みとなりましたが、今回もオンラインであってもどうしたらみなさんと“触れる”感覚を共有できるかを模索しました。画面越しでも「思ったよりも伝わった、受け取ってもらえたなという感覚があった。」と、話す入手さん。その場にいないからこそ、より注意深く相手を感じようとする意識が向けられていたと振り返りました。また、1日目に職員のみなさんのみに向けたワークショップを行なったことで、参加者への触れ方や距離感など、入手さんが意図することが伝わった感覚があったそうです。白神さんも「職員さんの協力は不可欠ですよね」と、職員さんへのアプローチについて興味深く聞いていました。

平塚市にあるスプラウトと白神さんの取組みも、今年度が2年目になります（詳細はP14-15参照）。今年度のオンラインワークショップでは、「失敗してもいいのでいろいろやりましょう」というスプラウトから言っていただけたので、さまざまなトライをできて良かった。」と振り返りました。今回は舞台美術家の長峰麻貴さんにアシスタントに加わっていただき、さまざまな素材をスプラウト側にも用意しました。ゴムが画面を越えてお互いの空間に伸びていくなど、同じ素材・感触を通してつながるような取組みを見た入手さんからは、「オンラインだからこそおもしろく見えるのでは」と、オンラインならではの遊びの可能性が話されました。

ダンスの根源に立ち返る

話題は、ふだんの稽古や創作とワークショップの場作りの共通点に移ります。入手さんは、その場の空気や音とコミュニケーションを取るようにして踊っているそうですが、「私が纏っている空気とか感覚丸ごと見てくれて一緒に踊ってくれるっていう感じがする。」とリエゾン笠間では、受け取る力の強さを感じると言います。主宰するダンスグループのメンバーと意見を交わしながら作品を作ることが多い白神さんは、「スプラウトでは言葉の代わりに、目線や距離感など、身体を通してその人を知っていき、場を作っていた」と手段は違っていても、その人を知る時間を大事にしていることに気付いたと話しました。

障がいのある人との取組みを通して、入手さんと白神さんはそれぞれ、「自分がどういう時にダンスを感じるか、どうやったらそれを共有できるかを探る」「なにかで遊んでいる時間が好きで、それがダンスになってる」という、ダンスの根源に立ち返ることができたと話します。それは、対面でもオンラインでも変わらない、本当に大事にしたいことなのだと思います。コロナ禍におけるさまざまな制約が、いま置かれている場やそこにいる人にとって一番大切なことに立ち戻るきっかけになるのだと、とお二人のお話を聞いて感じました。



入手杏奈
（いりて・あんな）
→P13参照

白神ももこ
（しらが・ももこ）
→P15参照

障がいのある子どもたちの学びを広げるために

第3回

佐塚丈彦（公益財団法人 日本教育公務員弘済会 神奈川支部）

公開日：2021年2月5日(金)～2月8日(月)　　参加者：51名　　録音・整音：三村一馬

収録場所：障害者スポーツ文化センター ラポール上大岡　多目的室(神奈川県横浜市港南区上大岡西1-6-1ゆめおおおかオフィスタワー8F)

障がいのある子どもたちとの出会い

今回は、長年特別支援教育の現場で障がいのある子どもたち・保護者・関係機関等との関わりを続けてきた佐塚丈彦さんに、家族や地域を巻き込みながら、子どもたちの学びと成長の機会を広げてきた実践についてお話をうかがいました。

はじめは体育の教員として、中学校に着任した佐塚さん。しかし「骨や筋肉など身体の知識が、障がいのある子どもたちとの関わりにも活かせるのではないか」という思いから、特別支援学校の教員免許を取得し、特別支援学校の教員になり、知的障がい・肢体不自由児の教育に携わりました。校長初任校の中村特別支援学校は一般の小学校と併設になっており、日常的に交流が生まれていました。入学当初は、特別支援学校に通う子どもたちに対して「なんで鼻にチューブが入っているの」など不思議がっていた子どもたちも、徐々に表情だけで相手の様子が分かるようになり、卒業後には車椅子を押している方を自然と手伝える大人に成長していったと言います。佐塚さんは「そういう種を蒔くことで、想像力のある子どもたちが増えていき、社会が変わっていくのではないか。種を蒔く人は先生に限らず、社会全体がそういう意識を持つことが求められている」と話します。

地域のなかに仲間を広げる

学校時代に障がいのある子どもたちやその家族に出会った経験から、「みんなのことをもっと社会に知らせていかなければいけない」という気持ちが芽生え、障がいのことを知ってもらうための活動を始めました。
学校在籍時に作った障がいのある子どもとの身体の関わり方をまとめた本や、親子のコミュニケーションについて書いた本などは、家族のみなさんといっしょに完成させました。絵の得意なお母さんが描いたイラストとわかりやすい言葉で作られた本は、教育や福祉の現場だけでなく、介護や子育てをしている方など、幅広く活用できるものとなっています。また、障がい児・者が楽しめる横浜市内の外出先がまとめられた「よこはまist。」という冊子も、地域のNPOや家族との協働から生まれました。障がいのある子どもとの外出は家族にとっては勇気のいることですが、外に出ることで周囲の理解も深まるのではないか、と佐塚さんは考えてます。この冊子はその後東京版や仙台版と地域を広げて発行されました。さらに、現在佐塚さんが会長を務める神奈川ボッチャ協会では、障がいの有無に関わらず参加できる大会を開催したり、学校や地域に出かけてボッチャの普及啓発活動をしています。

こうした取組みは、常に多くの人の協力を得て実現しています。これまで出会った人にアイディアを相談してみること、そして思い切って人に任せることが仲間を広げる秘訣だという佐塚さん。ボッチャのように、芸術文化の取組みも、障がいの有無に関係なくみんなで楽しめる部分を持ち合わせていると思います。佐塚さんが行なっている仲間づくりのように、異なる分野が補い合いながらつながり輪を広げることで、社会がちょっと豊かになる。障がい福祉と芸術文化が関わる活動をとおして、そんな土壌づくりをしていきたいと思いました。

佐塚丈彦
(さつか・たけひこ)

中学校と特別支援学校の教員と特別支援学校の管理職を歴任。2020年から財団法人日本教育公務員弘済会にて、子ども・学校を支援する事業推進に携わる。パラリンピック正式種目のボッチャ普及活動で神奈川ボッチャ協会会長を務める。

報告会

令和２年度　神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

地域とともに考える障がい福祉と芸術文化

第1部：神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターより事業報告

第2部：話題提供「相談から支える豊かな暮らし」

瀧澤久美子（横浜市障害者後見的支援推進法人（横浜市障害者支援センター）　アドバイザー）

公開日：2021年3月12日（金）～3月19日（金）　　参加者：115名

収録場所：障害者スポーツ文化センター ラポール上大岡　多目的室（神奈川県横浜市港南区上大岡西1-6-1ゆめおおおかオフィスタワー8F）

今年度の取組みを報告するとともに、相談支援に焦点を当て、長年横浜市で障がいのある人やその家族に寄り添いながら地域を耕す活動を続けてきた瀧澤久美子さんにお話をうかがいました。

障がいのある人、家族、地域と築いた制度

もともとソーシャルワーカーを目指していた瀧澤さんですが、さまざまなきっかけから1973年に聖坂養護学校の教員になりました。勤め始めてすぐの頃、在籍する子どもの親が、我が子の命を絶つという事件がありました。ＰＴＡの中ではこの親に対する減刑嘆願運動も起こりました。子どもの命を大切にすること、家族の暮らしを支えること、この2つのことが要だということを突き付けられました。「この出来事が、その後の仕事の原点になっている」と瀧澤さんは話します。教員として子どもや家族と向き合うとともに、福祉関係者や学校と協力して、「障がい児・者の作品展」を開催して障がい理解を促したり、夏休みに入所施設の子どもたちが帰宅して空いた施設を借りて、子どもたちと2泊3日のコミュニティキャンプを行なったりして、地域と子どもたちの関わりを深めていきました。

同じころ、「地域の中で子どもを育てたい」という、障がいのある子どもをもつ8人の父親たちによって、横浜市在宅障害児（のちに「者」）援護協会（通称：在援協）が1973年に設立されました。「地域を耕す」「自主自立」など理念に掲げ、既存の制度に障がい者や家族を合わせるのではなく、生活の質を高めるために声をあげていく運動を行なっていきました。最初に取組んだのが、就学前の子どもたちの集まる場である地域訓練会の立ち上げです。障がいのある人とその家族の運動が土台となって行政に働きかけ、その運動を支えたのが在援協でした。その在援協の歩みが、現在の障害者支援センターに受け継がれています。横浜の福祉制度は「当事者や家族」「支援者」「行政」の三者が一体になって作り上げられてきた歴史があり、今でも横浜の福祉行政の取り組みは当事者や支援団体の声を大切にしていると言います。

教員生活は9年続きましたが、ご家族の事情で離れなければならなくなりました。そのタイミングで栄区の親の会に関わりはじめ、また、在援協から声がかかり在援協巡回相談員となって、新しい一歩を踏み出しました。栄区の親の会では、地域訓練会の設立など、6つの要望がありました。その中でも瀧澤さんは、家族のさまざまな事情に応じ、障がいのある子どもを預かる、横浜ではじめてとなる「一時ケア」に力を入れました。ボランティアのみなさんの手を借り、その時にある手段や仕組みを組み合わせながら、母親やきょうだい児を含めて支える工夫をしていきました。子どもたちの支援から始まり、現在では“親亡きあと”の不安に寄り添う横浜市障害者後見的支援制度の理解・普及に関わっています。

いっしょに揺れながら、待つ

障がいのあるお子さんとその家族の暮らしが抱えるさまざまな状況の相談を受けるなかで、「いっしょに考えながら、一つひとつ問題を紐解いてきた」という瀧澤さん。すべてがすぐに解決できるわけではなく、“はてなマーク”を心の中にそのまま持ち続け、数年後に理解できるようになったり、新たな制度ができて、それを活用できたりすることもあったと言います。支えきれない部分があったり、本人や家族の葛藤もあるなかで、「（本人が前に進む）タイミングを待ちながら、いっしょに揺れていた」という言葉を聞いて、“寄り添う”とはどういうことなのか、すとんと腑に落ちたように感じました。

最後に芸術文化に期待することをうかがってみました。瀧澤さん自身も演劇や映画に親しむなかで、「表現をとおしてその人自身を知ることができることはとても大事なこと」と話します。ただ、障がいのある人が芸術文化に触れる機会はまだ少なく、芸術家との出会いをつくるなど、創作へのきっかけづくりが求められているのではないかと投げかけました。芸術文化には具体的な暮らしの問題解決には直接に答えることは難しいことですが、それでもその人が持っている想いを引き出したり、その想いを他の人につなげることはできるかもしれない、そのことでその人の生活が豊かさとひろがりをもつかもしれません。いっしょに揺れる余白を持ちながら、今後も活動を続けていきたいと思いました。

瀧澤久美子
（たきざわ・くみこ）

聖坂養護学校教諭、横浜市在宅障害者援護協会巡回相談員、地域コーディネーターを経て、現在は後見的支援制度の普及啓発に従事。
障がい児者・家族の相談や地域資源との調整業務に留まらず、新たな社会資源を開拓するなど、障がい児者・家族に寄り添った活動をしている。

障害と身体を
めぐる旅2020

— 実践編 —

おわりに

障がいと身体をめぐる旅に最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。
私たちが出会ったさまざまな身体、言葉、風景…。みなさんに届いたでしょうか。
この旅の記録が、みなさんの身近にある身体、言葉、風景を、これまでとは違う視点で見つめるきっかけとなったのなら嬉しいです。

今年度は新型コロナウイルスの感染が広がるなかでのスタートとなりました。神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターが立ち上がり、県内の障がい福祉と芸術文化に関わっている施設や、そこで活動をされている人にご挨拶をしに伺いたかったのですが、それが難しくなってしまったことはとても残念でした。
しかしオンラインツールを活用した取組みをはじめ、多くの方のご協力を得ながらさまざまな工夫を模索できたことは、貴重な経験となりました。直接会うことができず、限られた情報のなかでいかにコミュニケーションを取り、心が動く瞬間が作れるかを考える時間は、障がい福祉と芸術文化の関わり方を見つめ直す機会にもなりました。

これからも、どんな状況であっても芸術文化に触れられる場のあり方を探りながら、さまざまな表現が交差する風景を見つけに、旅を続けていきたいと思います。

神奈川県
障がい者
芸術文化活動
支援センター
令和2年度

ST Spot Yokohama

「障害と身体をめぐる旅2020 実践編」

編集	田中真実、川村美紗	写真	金子愛帆（P.12〜15、18〜20）
デザイン	水色デザイン	イラスト	熊本奈津子
印刷	共進印刷	テキスト	川村美紗、鶴田理紗

発行　神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター
〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル208
（ 認定NPO法人　STスポット横浜 地域連携事業部内 ）

発行日　2021年3月31日

本事業についての問い合わせ：神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15　横浜STビル208
（ 認定NPO法人　STスポット横浜 地域連携事業部内 ）
TEL：045-325-0410　FAX：045-325-0414　MAIL：info@k-welfare.org
https:// k-welfare.org　神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター
https://www.stspot.jp　認定NPO法人 STスポット横浜

過去の事業を動画でもご覧いただけます。
以下のQRコードを読み取るか、YouTubeで「アーティストとともに過ごす時間」で検索ください。

リエゾン笠間 × ドゥイ、勝見淳平
「触る、で広がる世界」

ひふみ × 岸野雄一
「身体を流れる音楽」

みどり福祉ホーム × 砂連尾理
「身体と身体で出会う」

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

令和2年度